

“ 高尾の里と拠点施設…… 20年後の姿 ”

20年前の高尾山観光は、どちらかと言うと薬王院参拝と自然を味わう中高年のハイキング層が過半を占めていた。一方、若者やファミリー層は少なく、高尾山に登って帰る個人や友人連れの日帰り観光が主流だった。当時の来訪者は、年間250万とも推計されていたが、地元の認識はもっと少なく、かつ年々減少しているのではというのが実感だった。社会や経済の変動する中で、人々の価値観や嗜好の多様化や観光レクリエーション施設の増加の波があった当時、地元には相当の危機感が生まれていた。

そして、2008年の拠点施設の建設を契機に、総合的な高尾の里づくりがスタートした。基本コンセプトは、`新しい門前町 = 現代に生きる門前町`。薬王院、高尾山さまという信仰の山のこの地で、いかにこの特徴を活かし、発展させていけるかが最大の課題であった。その答えはまだ完全ではないが、徐々に成果は出てきた。すなわち門前町に住み、働く人々が、つねに豊富な自然資源と信仰の山という背景を意識しながら自ら考え行動してきたこと、それがまさに個性ある里づくりにつながった。

・高尾の里の20年後の姿

2026年の今、心が和み風情のあるまちなみ、歩いて楽しい街、カメラのシャッターを押したくなる景観、また来たいと言えるような環境が整ってきた。特に、地元の商店の受け入れの姿勢、ホスピタリティがきわめて高く特に女性層に好評で生き生きとした門前町となった。

昔からとろろそばなど、おいしい食はあったが、さらに磨きをかけて野菜をはじめ地元産の食材を取り入れた、ここだけでしか味わえない名産品もできあがった。いわゆる名物料理だが、昔は素通りしていた客も、今では必ずといっていいほど食して帰る。また、以前は地元以外の土産物がほとんどだったが、今では地元の材料を活用した付加価値の高い土産物が並んでいる。

まちなみも、門前町にふさわしい瓦と漆喰の落ち着いた外観が並ぶ。そして、参道沿いには、紅葉やシャラなどの落葉樹が潤いのある環境をつくっている。樹木で駐車場も隠れている。樹の脇には木製のベンチが置かれ、お年寄りが休みながらお茶と地元の菓子を楽しんでいる。この風景は、よくTVの撮影に利用されている。

150mも満たない参道が、樹木で適度に見え隠れし先に行く期待感が生まれた。

看板類も木製で統一され、サインも門前町らしい巧みなデザインで統一されている。目立たないが必要な場所に存在している。

また、参道には月に2度、市が開かれるようになった。近郊の農産物や骨董市も開かれるし、年に数回フリーマーケットも開催され、若者やファミリー層が多く集まる。20年前には想像できなかった姿である。地元の高尾の里組織(通称:里会さとかい)が思い切ったイベント戦略を具体化した結果である。

このような取り組みの結果がどうかかわからないが、周辺にはガラスや陶器あるいは彫刻などに取り組む若い芸術家が暮らし、工房を兼ねた住居を建てている。これも新しい姿。

見違えるよう変貌したのは、川、道路、公園との有機的つながりである。駅の脇にある公園と裏道そして案内川は一体的な環境整備が図られ、人の流れが川と一体となり、橋をわたり甲州街道を歩く人がきわめて多くなっている。ここの橋は、全国的なコンペで採用されたデザインである。また、参道突端の橋も広げられ、橋というより広場となり目標となっている。昔はここまで参道を歩く人は稀であったが、今ではほとんどの人が歩いている。里の橋はそれぞれ周辺に溶け込みながらも、魅力あるデザインで付け替えられ、愛着のわくものになっている。また、観光客のシャッターポイントになっている。

さらに景観上重要なことは、川に面する建物は、すべて川側を表にして建っている。昔は裏を見せ、看板で隠していた。地元の建築協定の成果である。今は水辺に看板は全くない。

また、川と道、特にもみじ広場の商店長屋が、今まで隠れていた川を活かした建物となり、まさに山への玄関口としてふさわしい風情がある。ここの広場は左に川、右に小さな滝と池を有した水の広場に生まれ変わった。昔は、簡易ベンチが置かれていたが、今では周辺景観に配慮したデザインの木製ベンチが置かれている。とりあえず置いたという安易さは、もうこの里の風景にはない。

景観といえば、甲州街道沿いの景観も大きく変わってきた。道沿いの商店や住宅は、紅葉等の植栽と塀や建物全面はできるだけ瓦、漆喰の使用を協定で取り決めている。以上のような景観形成は、先の里会が中心となって協定案をつくり地元の協力を得て実現したものである。まさに20年の成果である。

高尾の里全体は、昔に比べ瓦屋根と漆喰の壁、ほどよく植えられた紅葉樹木、そして川の流れとポイントに趣のある橋が付け替えられ、情緒のある門前町に生まれ変わった。決して大規模な改造をしたわけではないが、全体の調和と個々の努力の積み重ねで創造されたものである。

もう一つの成果は、当時は裏の小路であった路地や橋の整備、お店の集積が図られ魅力的な路地空間が生まれた。この結果、里全体に点のつながりから面的拡がりができ、回遊の楽しさが倍増した。路地文化である。

駐車場不足は高尾の里全体の大きな悩みであったが、鉄道事業者や周辺農家の協力を得て、駅周辺に増設ができた。観光バスの収容力はほぼ十分である。観光客の乗り降りは駅の駐車場ですませ、ここから里と山を回遊する散策道が整備されており、お年寄りや車椅子の方も安全に回遊することができるようになった。

休みの日には、これらの人の案内と歩行をサポートする市民ボランティアも生まれた。ハード面の整備だけでなく、このようなホスピタリティの高い受け入れ側の姿勢が、感じのよい観光地として認知され、リピート客の増加につながりつつある。里会が、地元商店の人々に研修の機会をつくり、人づくりから始めた地道な努力の結果である。

・拠点施設の建設

このような里に変えた原動力として、高尾の里拠点施設の建設がある。

・基本理念

この施設の大きな目標は、高尾山の観光レクリエーションの核づくりであった。

そして、旧高尾自然科学博物館等の跡地は高尾観光を語るうえで最大かつ最後の開発用地であり、それだけに地元、行政、事業者の期待も相当のものであった。

機能面では博物館や八王子車人形の公演、森林センターなど多様な要素を盛り込みながら、高尾の里と一体となって魅力ある観光地を、いかに築いていくかが施設計画に問われていた。当初、多様ゆえにどれも中途半端になるのではないかと、という危惧もあった。また、今までの博物館や森林センターでは、とても集客できないという地元の声も多かった。それらの意見を反映して、ここは楽しく、かつわくわくするような場所であってはならないという共通認識を深くもち、民間活力等を積極的に導入しながら、行政の枠を超えた運営にチャレンジした結果、今では極めて高い集客力を誇っている。今日では、観光文化施設での民間活力導入の成功事例として全国的にも有名である。

今では、以前高尾山に登りすぐに帰路を急いでいた観光客の大半が立ち寄るが、それだけではなく山に登らなくてもここに来ることを目的にした観光客も多い。単に観光施設というのではなく、高尾の自然・歴史文化や八王子車人形等の公演、さらに後背地である高尾山の自然を相手にした様々な教室・イベントの開催など知的レクリエーションが準備されているからである。登山や信仰目的以外の裾野が広がってきた。20年前から観光客数も増加の一途を歩んでいる。

さらに、学校の社会科見学で来山する校数も増えてきた。これは、次代を担う子どもたちへ自然からのメッセージを送ることを最大限意識した結果である。

このような成果を得られたのは、一言で言えば、市民や企業、あるいは「高尾の里」の里会と行政の協働による努力の結果であり、新しい施設運営のモデルとなっている。

・高尾まるごと博物館

ここは、高尾山と「高尾の里」の自然、歴史文化を展示や映像をもとに楽しく学習することができる環境を備えるとともに、高尾の多様な魅力を全国に発信する新しい知的欲求を満喫できる生涯学習の基地である。そして従来の博物館のイメージからは大きく前進し、内にこもるのではなく、外に出る博物館として、観光客のニーズに対応した強い機動力のある刺激的な施設に成長している。

この施設の最大のメリットは、背後に緑のオアシスといわれる高尾山、薬王院そのものが存在すること、すなわちそれらが一体となった高尾まるごと博物館。スタッフ一同は、高尾まるごと博物館を想定して、建物内だけに留まるのではなく、フィールドとの関係をいかに巧みに連携させるかを、常に念頭に置いた。今では登山道に小さな説明板が置かれているが、これは積極的なボランティアの方々が設置したもの。また、山の中には、数台のカメラが設置されている。ここでの生の映像は、そのまま無線で館内の大きな3Dモニターに映し出され若葉、新緑、紅葉、そして雪化粧が風のゆらぎとともに生の迫力を感じることができる。

展示は従来のように説明的に置いているのではなく、可能な限り生のものに触れるところまで接近させ、小さいながらも圧倒的な臨場感を感じられ、すごいと言われるようなこ

こだけの空間構成を目指した。また、展示物を固定させるのではなく、年に数回模様替えを行いながらリピート性を高めるなど、つねに新鮮な驚きを提供するソフトを市民と協働で研究開発している。

もう一つの特徴は、次代を担う子どもたちへ自然の力、自然の魅力を知ってもらい、自然の大切さを心身にわかってもらえる仕組み、「高尾こども自然スクール」を市民との協働で築いたことである。ただ見せるのではなく、ボランティアが説明し、対話をしながら「見る・視る・観る」で知的好奇心を目覚めさせるプログラムである。ボランティアに説明能力の講習を行い、プロの学芸員に負けない力量を身につけている。

さらに昆虫写真家を招き、子どもたちにミクロの昆虫世界を知ってもらう取り組みや、植物画の講習会、地元の植物等を活かした染色講座など様々かつユニークな取り組みが行われている。イベント場所は再生された古民家を活用する場合もありとても好評。八王子の小学生は自然のこと、特に山や昆虫・植物のことをよく知っているという評判である。もちろん環境への意識が高い。

今では、まずここに来て学習してから、山に登るパターンが定着しつつある。

市民との協働で企画展も年に数回開催され、規模を誇るのではなく内容重視のスタンスが好評で、特に女性客の見学が多い。

さらにユニークなイベントは、高尾寄席を週に3日開催して高尾の自然や歴史を語ってもらう取り組みである。映像や機械物に飽きた今日、もっとも集客性が高いのはやはりライブ。若い落語家に依頼しての寄席は、これだけを楽しみに来るお客さんもいるほど盛況。ついでに博物館も見学する。主従が逆転しているが結果は同じ。八王子車人形と競っている。このような取り組みも、民間活力を積極的に導入した成果で、かなり行政の枠からはみ出ているが話題性と集客性は、とても高くなっている。

この博物館は、ネットワークを駆使して市内全域がエリアの対象という市のエコミュージアム構想の中で、サテライトとして位置付けられている。特に高尾山・薬王院、そして自然系の拠点的な性格をもつ博物館があり、高尾にある国・都などの観光・学習施設と行政の縦割りを超えた連携を行っている。このような幅広い活動を実現するには併設する森林センターとの連携も大きな力であり、年間の運営プログラム等を共同で計画し、魅力あるかつ効率的な運営を行っている。

・八王子車人形

車人形の西川古柳座が、公演はもちろん練習活動もここでやる基盤が整い、近年は経済的にも自立の展望がもてるようになってきた。当初は週2回の公演程度だったが、評判が評判を生み今では1日2回の公演をこなす盛況ぶり。見学ツアーを組まれ年間5万人以上の観客動員数である。入場者数は年々増加しており、さらに公演回数を増やす検討に入っている。

八王子の誇れる文化、全国クラスの伝統芸能に名目ともに育っており、世界に向け文化を発信し、八王子の知名度を上げている。

公演ホールは、古民家の木造骨組を活かした臨場感溢れる芝居小屋。当初、新施設に取り組んだ方がしっかり造れるという意見も多かったが、古民家の雰囲気芝居小屋にマツ

チし、再生にチャレンジした。楽屋等の増築を施し120席収容、補助椅子や立見を入れると最高200人まで収容できる劇場となった。ほぼ八王子車人形の専用劇場となり、練習等も含め座の活動拠点となっており、古民家全体の管理も座に委託している。

また、車人形本体が100体ほどあり、ホール全面のエントランスに常時10体ほどが展示され独特の迫力をもった展示空間になっている。

・薬王院等の宝物展示

もう一つの目玉は、薬王院等の貴重な古文書等の宝物の展示である。薬王院の全面的な協力を得て、ここでしか見ることの出来ない書物、そして薬王院の歴史という15分程度の映像で大画面に、そのゆかりをわかりやすく紹介している。今まで登山のついでにお参りしていた観光客も、高尾山さまという呼称で山を身近に感じることができるようになった。自然の中で生まれ培われてきた信仰の山を、深く理解できるようになった。

ここに来れば、高尾山と薬王院の歴史がわかる。ただ宝物を展示するだけでなく、山にまつわる様々な講座が生まれ、特に中高年層に人気がある。今日では参加者が自主的にサークルをつくり研究活動を行っているとともに、案内役などのボランティア活動にも参加している。

・情報発信

高尾山に関する観光情報や自然関連の情報は、パンフレットやインターネットで数多く発信されていた。ここでの情報発信のメインは、博物館がまとめる月間パンフレットとホームページであるが、パンフレットは絵をできるだけ取り入れた手作り感の強い内容のあるものとして有名である。書き手も自然界で著名な方々に依頼して、内容のあるものになっている。売れるパンフである。またホームページは、ここの持ち味を出すうえで、特に子どもに的を絞った内容とした。そして発信するだけでなく、子どもたちからの質問コーナーを設け双方向のプログラムをもっており人気がある。

また館内の情報コーナーにはIT機器を利用した検索などがもちろん可能だが、できるだけ案内ボランティアが会話を通して生きた情報を伝えるように心がけている。このような暖かいもてなしの精神が里全体に培われてきた。

・さわやかな憩いと交流の空間

拠点施設全体の風景は、穏やかな傾斜をそのまま活用した屋外空間が広がるなかに、低く抑えられたシャープなデザインの新施設と和風の古民家が並存する、切れ味のいいモダンな風景。伝統的なデザイン要素を取り入れながら、四季折々の季節で眺めが変わるような、伸びやかで趣のある風景が特徴である。家族で楽しめる大きな広場も用意され市民の多くは、この風景を見るためだけにここに来ることが多い。この屋外広場では、大きなイベントが開催され様々な交流が芽生えるとともに、今や評判が広がり、休日はやや混みすぎの感がある。

さらに案内川の水辺まで行ける親水環境が整備され、夏には子どもたちが水遊びを楽しんでいる。景観面でマイナスであった甲州街道の擁壁には、多自然型河川工法で改修され、

和らいだ景観になっている。

また、館内の会議室等は地元町内会にも開放され、地元の人々もこの施設にとっても愛着をもっている。河川の清掃はもちろん周辺の美化活動にも力を入れている。

甲州街道は桜並木等が徐々に形成されてきたが、街道沿いの宅地にも樹木や花を植え環境美化に努めている。

拠点施設全体の印象は、高さが押さえられ控えめだが、斬新なデザインの建築群が古民家とともにあり、それを包括するように案内川を含んだここにしかないランドスケープが展開されている。甲州街道からは、八王子の玄関口としてのシンボリックな景観であり、建物内部からは広がりのあるオープンスペースが背後の山と重なり合って心地よい眺めが印象的である。

・森林センター

併設する森林センターは、当時可能な限り一体的な運営や別棟を避けようという議論の中で、完全な合築は無理であったが、新施設と広場を共有する形態まで可能となった。このことにより、新施設と機能面、利用面、かつ景観面において一体的な連携が可能となった。なによりユーザーが迷わず利用でき、景観的にも一体となった効果はきわめて大きいものがある。

・運営

拠点施設の運営の大きな特徴として民間資本・活力の導入がある。魅力があり、かつ新鮮な知的観光拠点であるためには行政の枠では限界があると考え、進んで民間との連携を模索し具体化した。

博物館機能、森林センター、八王子車人形、薬王院等の宝物など観光資源が並存する一方、どれも中途半端に陥る可能性が指摘されていた。それを回避するためにまず、全体を統括する運営組織を設置し、相互の連携と年間魅力化計画の実現、そして無駄のない運営を念頭におき、国、市、民間の垣根を越えた運営を実現した。さらに、拠点施設の館長を公募し、観光業界のキャリアを抜擢したところも大きな鍵であったと考える。責任をもって取り組む方向性、そのチャレンジが、観光という内容にはきわめて重要なポイントだった。

このような斬新な運営面のチャレンジが成功しつつ、ハード面のみならずソフト面においても、八王子の西の玄関口に知的な環境が形成されつつある。

冒頭述べたように、信仰の山という背景、培われた高尾山の歴史文化、そして自然という貴重な資源を守りながら、学習というキーワードを軸に展開した20年であった。信仰の山の新しい門前町として、自然と歴史の豊かな資源を有効に活用して皆で「高尾の里」をつくりあげてきた。

「高尾の里」全体で展開されている新しい知的なレクリエーションの運営が、ハードのみならずソフトも評価され、全国からの視察が絶えない。